



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	書評：ネイチャーウォッチングガイドブック ヒラムシ 水中に舞う海の花びら
Author(s)	奥野, 淳兒
Citation	Fauna Ryukyuana, 22: 1-5
Issue Date	2015-08-09
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/38646
Rights	



書評: ネイチャーウォッチングガイドブック ヒラムシ 水中に舞う海の花びら

奥野淳兒

〒299-5242 千葉県勝浦市吉尾123 千葉県立中央博物館分館海の博物館 (okuno@chiba-muse.or.jp)

ネイチャーウォッチングガイドブック
ヒラムシ—水中に舞う海の花びら— 特徴がひと目でわかる各種ヒラムシの図解付き
小野篤司 (著)
誠文堂新光社 2015年7月14日刊行 223 pp.
ISBN978-4-416-71523-9 3200円+税

扁形動物門渦虫綱多岐腸目に属するヒラムシ類は、一般にはほとんど馴染みのない動物である。我々人間との直接の接点と言え、カキ類の養殖場に大発生して貝殻の中に侵入し、軟体部を食べて台なしにしてしまう害虫として水産関係者に忌み嫌われる存在という程度であった。近年、手軽に水中撮影ができるコンパクトデジタルカメラやハウジングの普及により、スクーバダイビングをしながら海中生物の撮影を楽しむダイバーが増えてきた。特に被写体として人気のある軟体動物のウミウシ類に形や大きさ、色彩が似ているため、これまで人との接点がほとんどなかったヒラムシ類もダイバーに注目されるようになった。評書は、そのようなダイバーを主な対象に、ヒラムシを「同定できる資料本」（カバーのそで文章より）として出版された。

評書をめくると、まず圧倒されるのが膨大な数の美しいヒラムシ類の写真である。評書の著者は慶良間諸島でダイビングガイドを本業としているため、永年に渡って撮りためたヒラムシ類の写真がふんだんに使われている。ここ数年、評者はヒラムシ類の標本収集を試みているが、色彩の美しいニセツノヒラムシ科を採集する機会は多いとは言えない。収穫ゼロだったフィールドワークを何度も経験している。それを考えると、美しい種ばかりの写真をこれだけ集めたことには、驚きを隠せない。従来、琉球列島で撮影されたヒラムシ類の水中写真がまとまった書籍として、Kuitert & Debelius (2009) が挙げられる。評書はこれを凌駕する種数が掲載されており、琉球列島のヒラムシ類の多様性に関する情報を大幅にアップした。評書には「特徴がひと目でわかる図解付き」とサブタイ

トルにあるように、種類ごとにカラーイラストが添えられ、イラスト上の識別形質に引かれた指示線とワンポイント解説によって、容易に区別できるように工夫されている。この手法は、ヒラムシをよく知らない人にとって大変有効であろう。見慣れない人からすると、写真を見ただけではどちらが頭なのかすらわかりにくい生物だからである。さらに、主題とする同定のための写真ばかりでなく、ヒラムシ類の探し方や摂餌、繁殖行動、外観が類似した生物との比較などが多数の水中写真を使って紹介されている。

たくさんヒラムシ類の写真に圧倒される一方、目につくのが未同定種の多さである。評書で解説しているヒラムシ類は219種である(PP. 220–221の「和名索引」より算出)。そのうち、未同定種が155種に達し、種名を特定することができるのは64種(約29%)である。さらに、種レベルまで同定されているもののうち、38種は学名のカタカナ表記であることから、一般ダイバーのニーズに応える「標準和名がわかる種」となると、僅か26種、評書で扱われたうちのたった12%にすぎない。はたして、これでも評書が「日本で初めてのヒラムシが同定できる図鑑」（カバー裏表紙より）と言えるのであろうか。ただし、評書においてダイバーのためだけに安易な仮称や新称などの「標準和名のようなもの」をいっさい提唱しなかったのは、賢明な判断であったと評価したい。動物のすべての分類群で統一されたルールやガイドラインはないが、同定に疑問が生じたときに詳しく調べ直して混乱を回避するため、標準和名は標本に基づいて提唱されることが推奨されている(松浦, 2009)。

評書はまた、ヒラムシ類の分類学的・生物学的情報に問題点が非常に多い。ヒラムシ類は多様性の高さの割に分類学者が少ないため、記載分類が進んでいない。しかし、これまで先達が積み上げてきたヒラムシ類の研究によって、明らかにされたことは決して少なくない。これらを引用し、何がどこまで判明してい

るのか、という情報を可能な限り正確に盛り込むことは、ガイドブックの著者の責務なのではないか。「はじめに」において、評書は布村 (1992) と Newman & Cannon (2003) を主要な文献として記述されたことに触れられているが、これらは市販されている二次資料であり、それまでの研究成果の概要に過ぎない。評者は大学の学部学生の頃、授業で課せられて提出したレポートに関して、「図鑑や教科書の巻末にリストアップされている原著論文にあたること」と指導を受けた。今日ではインターネット環境さえあれば誰でも無料でダウンロードできる原著論文もあり (少なくとも評書に掲載されたヒラムシ類のいくつかの原記載やその他の報告が該当する)、松浦 (2009) が指摘しているように、情報入手の視点からみると、研究者と一般の人たちが置かれている環境の差は小さくなっている。にもかかわらず、評書の著者は、大型書店では自然科学の専門書コーナーに配架されるような本を執筆するのに、過去の研究者らの努力を蔑ろにして、ろくに原著論文も調べないまま書き連ねたのではないかと判断せざるを得ない部分が散見される。長文になるが、以下に自然科学に関わる者としては看過できない部分について、3つの項目に分けて示したい。

1. 分類について

評書は「参考文献一覧」などを伴っていないため、「はじめに」に書かれた布村 (1992) と Newman & Cannon (2003) 以外にどのような文献を使用したのかが不明である。まず問題なのは、少なくとも布村 (1992) と評書で扱われている分類体系が一致していないことである。布村 (1992) には、多岐腸目科階級分類群に関して「この目の分類体系について、Faubel (1983, 1984) と Prudhoe (1985) が異なる考えを発表しているが、ここではおおむね後者の体系によった」と明記されている。しかしながら、評書で無吸盤亜目のヒョウモンヒラムシ *Ilyella gigas* の科位としているイリプラナ科 *Ilyplanidae* (P. 36) は Faubel (1983) によって創設された科であり、ヤツヒラムシ *Discostylochus yatsui* (P. 33) をカリオヒラムシ科 *Callioplanidae* に帰属した体系も Faubel (1983) のものである。布村 (1992) におけるそれぞれの科位は、ヒョウモンヒラムシがヤワヒラムシ科 *Leptoplanidae*、ヤツヒラムシがス

チロヒラムシ科 *Stylochidae* であり、その体系は Prudhoe (1985) に従っている。

また、評書ではイボヒラムシの学名を布村 (1992) に従い *Ommatoplana oceanica* としているが、科位については布村 (1992) が本種をクリプトケリス科 *Cryptocelididae* としたのに対し、Faubel (1983) が創設したニセスチロヒラムシ科 *Pseudostylochidae* としている (PP. 46–47)。ところが、Faubel (1983) はイボヒラムシの属位を移行して *Kaburakia oceanica* (Hyman, 1955) とした上でカリオヒラムシ科に含めた。つまり評書では、イボヒラムシの科位について布村 (1992) および Faubel (1983) とは異なった見解を示している。イボヒラムシをニセスチロヒラムシ科に移行したのは評書が初めてと思われるので、その点にまったく触れていないのは不備である。

さらに、種の同定や分類に関わるその他の記述にも、以下のように誤りや説明不足が見られる。

- ・カリオヒラムシ属 *Callioplana* Stimpson, 1857 の説明 (P. 32) に「本邦産2属あり...」とあるのは、本来、カリオヒラムシ科の説明に含まれるべきケアレミスであると思われるが、Faubel (1983) の分類体系に従うと、日本産本科ヒラムシ類には評書で認めているカリオヒラムシ属と *Discostylochus* Bock, 1925 以外に *Kaburakia* Bock, 1925 や *Koinostylochus* Faubel, 1983, *Neostylochus* Yeri & Kaburaki, 1920 など含まれるため、2属ということはある得ない。

- ・ヒョウモンヒラムシの解説文 (P. 37) に「本邦で以前使用されていた *Discoplana* 属はシノニムとされる」と述べられている。*Discoplana* Bock, 1913 と *Ilyella* Faubel, 1983 はいずれも *Leptoplana gigas* Schmarda, 1859 をタイプ種として創設された属であり (Prudhoe, 1989), 評書の著者が指摘するように両属は確かに異名関係にある。しかしながら、先取権は *Discoplana* にあるため、*Ilyella* は新参客観異名となり、*Discoplana gigas* が本タクソンの有効名となる (Prudhoe, 1989)。布村 (1992) も本種に対して *D. gigas* の学名を適用しているが、評書では理由を挙げずに Faubel (1983) の見解に従い、*Ilyella gigas* としている。

- ・*Pseudoceros bifurcus* に同定されている種 (P. 88) が、前ページ (P. 87) 上段では *Pseudobiceros* sp. となっている。

- ・*Pseudoceros intermittus* の標準和名は「シロ

ニセツノヒラムシ」であり (奥野・成瀬, 2013), 「シロイロニセツノヒラムシ」は評書の著者による誤認である (P. 95).

・ニセツノヒラムシ属の1種 21 *Pseudoceros* sp. 21 (P. 140) は, *Pseudoceros ouini* Newman & Cannon, 1994 に同定される (Newman & Cannon, 1994). 評書が主な参考文献に挙げた Newman & Cannon (2003) は, それまでに彼らが記載したすべての種を網羅しておらず, 本種は掲載されていない. なお, 本種は Newman & Cannon (2005) で扱われている.

・評書のクロニセツノヒラムシ *Pseudobiceros flavomarginatus* (P. 171) と布村 (1992) によって同種 (*Pseudoceros flavomarginatus* として) に同定された個体のカラー写真を比較すると, まったく色彩が異なる. 布村 (1992) を参考にしたのであれば, なぜこのように判断したのかを述べる必要がある.

・ヒラムシの1種 11 *Polycladida* sp. 11 (P. 212) は, 無吸盤亜目ツノヒラムシ科のツノヒラムシ *Planocera reticulata* (Stimpson, 1856) に同定される. 本種は日本産ヒラムシ類の代表種のひとつで, 各地の潮間帯で普通に見られる.

2. 分布について

ある学名の担名タイプ標本の採集地であるタイプ産地は, その学名を有効名とする種の分布範囲を論ずる上で外せない場所である. 評書の著者もこの概念を認識しており, *Pseudoceros contrarius* の分布において, わざわざ「パプアニューギニア (模式産地)」と記している (P. 90). 国際動物命名規約第4版日本語版 (動物命名法国際審議会, 2000) では, type locality の訳語として「タイプ産地」を用いているため, 模式産地はタイプ産地と書き換えられるべきである. 評書ではその大切なタイプ産地を分布の記述から漏らしている種が多い. また, いくつかの種において, 明らかにこれまでの分布記録が反映されていない. これらの問題点を以下に列挙する.

・ヒョウモンヒラムシはインド洋にも分布するため (Prudhoe, 1989), 分布の記述をインド・西太平洋とすべきである (P. 37).

・*Cycloporus venetus* (P. 53), *Phrikoceros baiyai* (P. 81) ならびに *Pseudobiceros flowersi* (P. 158) の分布に, それぞれのタイプ産地の位置するオーストラリア (Newman & Cannon, 1996, 1997, 2002) が含まれていない.

・*Cycloporus atratus* (P. 53) の分布として撮影地しか挙げられておらず, タイプ産地の位置するオーストラリア (Newman & Cannon, 2002) が含まれていない. そもそも, 海外で記載された種に同定されているのに, 分布に撮影地だけしか記していないのは, 不備である.

・ミスジホソヒラムシ *Prothiostomum trilineatum* はインド洋からも記録されているため (Pitale et al., 2014), 分布の記述をインド・西太平洋とすべきである (P. 73).

・*Prothiostomum komaii* の標準和名アミダホソヒラムシは, 奥野 (2015) によって千葉県産の個体に基づき提唱され, 本種のタイプ産地が静岡県の下田であることにも触れられている. 評書の出版以前にこの標準和名を使っている印刷物は奥野 (2015) だけであることから, 評書の著者が本文を参考しているのは明白である. にもかかわらず, 分布にこれらの産地が記述されていない (P. 73).

・*Pseudoceros rubronanus* はインド洋にも分布するため (Dixit & Raghunathan, 2013), 分布はインド・西太平洋とすべきである (P. 86).

・*Pseudoceros bimarginatus* のタイプ産地はインド洋西部のソマリアであるため (Newman & Cannon, 1994), 分布の記述をインド・西太平洋とすべきである (P. 89).

・*Pseudoceros indicus* の分布として撮影地だけしか記されていない (P. 94). 本種の原記載 (Newman & Schupp, 2002) において, 分布域としてオーストラリア, パプアニューギニア, ミクロネシア連邦のチューク, およびインド洋のスリランカとモザンビークが挙げられている.

・*Pseudoceros intermittus* は伊豆諸島八丈島産の標本に基づき, 日本初記録として報告された (奥野・成瀬, 2013). また, 本種はインド洋東部アンダマン海からも報告されている (Dixit & Raghunathan, 2013). 従って, 本種の分布の記述には, 八丈島とアンダマン海を加えるべきである (P. 95).

・*Pseudoceros josei* (P. 99), *Pseudobiceros damawan* (P. 157) ならびに *Pseudobiceros hymanae* (P. 166) の分布に, それぞれのタイプ産地の位置するパプアニューギニア (Newman & Cannon, 1994, 1997, 1998) が含まれていない. また, *P. damawan* と *P. hymanae* はインド洋東部アンダマン海からも報告されている (Dixit & Raghunathan, 2013).

・*Pseudoceros paralaticlavus* の分布には, 原

記載 (Newman & Cannon, 1994) で述べられているパプアニューギニアも加えるべきである (P. 105).

・*Pseudoceros imperatus* は琉球列島西表島、伊豆諸島八丈島、および房総半島産の標本に基づき、日本初記録として報告された (奥野・成瀬, 2013). 従って、本種の分布は、西部太平洋の熱帯、亜熱帯、温帯域が含まれるように記述すべきである (P. 113).

・イズノニセツノヒラムシ *Pseudobiceros izuensis* の標準和名を提唱した際に用いられた標本は房総半島産であり、本種はパラオからの記録もある (奥野, 2014). にもかかわらず、分布にこれらの産地が記述されていない (P. 167).

・クロニセツノヒラムシは日本の暖温帯域に比較的多い種であり、我が国でのサーキュレーションが極めて高い「新日本動物図鑑」と「原色動物大図鑑」(共に北隆館)に、本種の分布記録として三崎、韓国チェジュ島、およびインド洋 (*P. flavomarginatus* のタイプ産地を含むため) が記されている。また、奥野 (2014) は本種を房総半島から報告している。評書の表現 (P. 171) では、これまでに伊豆半島からしか見つかっていない種と誤解される。

評書の著者が分布の情報源となる文献を入手していたのに見落とししたり、記載し忘れたのであれば、文献の引用に関するリテラシーが乏しいと言わざるを得ない。もし、これまでの分布記録を知っていて意図的に外しているのならば、科学に関わる書籍を執筆する上であってはならないことである。

余談ながら、博物館に勤務する評者の元へは、多くのダイバーから被写体となった生物の同定依頼が寄せられる。その質問内容には、「種 A の分布域はどこそこからどこそこまでと書かれている。発見したポイントはそこから外れるのかが新記録となるのか」、「種 A と種 B の両方に似ているが、撮影地は種 B の分布範囲内なので被写体をそちらと判断してよいか」などのように、分布に関係するものが少なくない。評書の読者層として想定されているダイバーにとって、各種の分布情報は、種名を判断する際に大いに参考となっているのである。おそらく、ダイビング後のロギングの中でも観察した生物の分布についての会話がなされているであろう。従って、図鑑的要素を含んだガイドブックにおける分布の記述は、同定の正確性と同様

に重要な部分であると評者は考えている。

3. 編集に関して気になったこと

・「はじめに」の「布村昇, 1992」と P. 7 の「西村三郎, 1992 原色検索日本海岸動物図鑑 [I]」はまったく同じ文献を指しているのに、統一すべきである。評書の読者層を鑑みると、「原色検索日本海岸動物図鑑 1 巻 (保育社) でヒラムシ類を担当した布村 (1992)」とするなどの配慮が必要と思われる。

・Callioplanidae の和名がカリオプラナ科 (P. 8), カリオヒラムシ科 (P. 32) と統一されていない。

・「ヨイミヤミノヒラムシ」とすべきところが、「ヨイヤミノヒラムシ」(ミの字がひとつ抜けている) になっている (P. 15).

・評書が各種の学名に命名者名と命名年を添えない方針で作られているのならば、P. 86 の解説文中にある *Pseudoceros micropapillosus* Kato, 1934 にも命名者名と命名年を入れずに統一すべきである。また、学名を斜体で表しているのに、命名者名を入れる場合には立体で記すべきである。

・ニセツノヒラムシ属の 1 種 14 の解説文中の「Newman et al., 2003」(P. 136) とヨイミヤミノヒラムシの解説文中の「Newman (2003)」(P. 186) は、「はじめに」の「Newman L. & Cannon L. 2003」と同一のものだが、前二つの表記は誤りである。書誌情報は正確に記述することが望まれる。

評書がヒラムシの図鑑を標榜するのならば、日本産ヒラムシ類の分類学的研究が過渡期にあることと、著者の専門性に関する技量が水準に達していないことから判断して、出版は尚早だったのではないかと判断して、出版は尚早だったのではないかと判断して、図鑑的な造りではなく、単なる写真集として出版していたら、このような指摘を受けなかったものと思われる。しかしながら、世に出てしまったものは仕方がない。ヒラムシだけでこれほどの写真がまとまった本は日本で初めてである。評書はダイバーばかりでなく、広くナチュラルリスト全般に対して、ヒラムシという生物の存在を強くアピールしており、今後、多くの人々がヒラムシに興味を抱くキラコンテンツとなりうる書籍である。上述した指摘について、増刷あるいは改訂の際に修正、加筆を検討いただきたい。

引用文献

- Dixit, S. & C. Raghunathan, 2013. Polyclads of Andaman and Nicobar Islands. *Journal of the Andaman Science Association*, 18(2): 165–169.
- 動物命名法国際審議会, 2000. 国際動物命名規約第4版日本語版. 日本動物分類学関連学会連合, 札幌.
- Faubel, A., 1983. The Polycladida, Turbellaria: Proposal and establishment of a new system. Part I. The Acotylea. *Mitteilungen aus dem Hamburgischen Zoologischen Museum und Institut*, 80: 17–121.
- Faubel, A., 1984. The Polycladida, Turbellaria: Proposal and establishment of a new system. Part II. The Cotylea. *Mitteilungen aus dem Hamburgischen Zoologischen Museum und Institut*, 81: 189–259.
- Kuiter, R. H. & H. Debelius, 2009. World atlas of marine fauna. IKAN–Unterwasserarchiv, Frankfurt.
- 松浦啓一, 2009. 動物分類学. 東京大学出版会, 東京.
- Newman, L. J. & L. Cannon, 1994. *Pseudoceros* and *Pseudobiceros* (Polycladida, Pseudocerotidae) from Eastern Australia and Papua New Guinea. *Memoirs of the Queensland Museum*, 37: 205–266.
- Newman, L. J. & L. Cannon, 1996. New genera of pseudocerotid flatworms (Platyhelminthes; Polycladida) from Australian and Papua New Guinean coral reefs. *Journal of Natural History*, 30: 1425–1441.
- Newman, L. J. & L. Cannon, 1997. Nine new species of *Pseudobiceros* (Platyhelminthes: Polycladida) from the Indo-Pacific. *Raffles Bulletin of Zoology*, 45(2): 341–368.
- Newman, L. J. & L. Cannon, 1998. *Pseudoceros* (Platyhelminthes, Polycladida) from the Indo-Pacific, with twelve new species from Australia and Papua New Guinea. *Raffles Bulletin of Zoology*, 46(2): 293–323.
- Newman, L. J. & L. Cannon, 2002. The genus *Cycloporus* (Platyhelminthes, Polycladida) from Australian waters. *Raffles Bulletin of Zoology*, 50(2): 287–299.
- Newman, L. J. & L. Cannon, 2003. Marine flatworms: The world of polyclads. CSIRO Publishing, Collingwood.
- Newman L. J. & L. Cannon, 2005. Fabulous flatworms: a guide to marine polyclads. Version 1. CD-ROM. ABRS and CSIRO Publishing, Canberra.
- Newman, L. J. & P. Schupp, 2002. A new species of pseudocerotid flatworm (Platyhelminthes, Polycladida) from the Indo-Pacific. *Micronesica*, 34(2): 177–184.
- 布村 昇, 1992. 扁形動物門. 西村三郎 (編著), 原色検索日本海岸動物図鑑 [I]. Pp. 175–193, pl. 43, 保育社, 大阪.
- 奥野淳兒, 2014. 千葉県産クロスジニセツノヒラムシ属 (新称) *Pseudobiceros* Faubel (渦虫綱: 多岐腸目) の分類 (予報). *うみうし通信*, (82): 2–4.
- 奥野淳兒, 2015. 海の生きもの観察ノート 12. ヒラムシの博物誌. 千葉県立中央博物館分館海の博物館, 勝浦市.
- 奥野淳兒・成瀬 貫, 2013. 日本初記録のニセツノヒラムシ属 5 種. *沖縄生物学会誌*, 51: 57–66.
- Pitale, R., V. Bhave & D. Apte, 2014. First record of family Prosthlostomidae and *Prosthlostomum trilineatum* (Platyhelminthes: Polycladida) from the west coast of India. *Marine Biodiversity Records*, 7, e37: 1–6.
- Prudhoe, S., 1985. A monograph on polyclad Turbellaria. Oxford University Press, Oxford.
- Prudhoe, S., 1989. Polyclad turbellarians recorded from African waters. *Bulletin of the British Museum of Natural History (Zoology)*, 55(1): 47–96.

Book review: Flatworms Illustrated

Junji Okuno

Coastal Branch of Natural History Museum and Institute, Chiba, 123 Yoshio, Katsuura, Chiba, 299- 5242 Japan (okuno@chiba-muse.or.jp)

投稿日: 2015年8月2日

受理日: 2015年8月3日

発行日: 2015年8月9日